

平安鎌倉時代における「たまたま」「たまさかに」

「まれに」の意味用法について

土居 裕美子

一、はじめに

語彙史を考えるには、個々の語の相互の関係を捉え、その変遷を追っていく方法が有効である⁽¹⁾。従来、意味や形態に着目して、個々の語の関係を明らかにする様々な考察がなされてきた。例えば身体や動植物、食物などの名称語彙、比較的意味分野を限定しやすい感覚・感情語彙の変遷についての研究がある⁽²⁾。更に最近の語彙史研究は、意味範囲の限定の容易でない分野にも広がりを見せつつある⁽³⁾。本稿もまた、語史を一語一語個別に追うのではなく、語彙としてのひとつのまとまりの変遷を明らかにしようとする立場に立ち、一連の副詞語彙を取り上げ、意味用法の関係と、その変化について考察するものである。

平安・鎌倉時代において、「起こる回数が少ないこと」を表す副詞「たまたま」は、漢文訓読文、和漢混淆文に多く、和文に少なく用

いられる。これに類する意味用法を持つものとして、「たまさかに」⁽⁴⁾「まれに」が見られる。これら三語は部分的に重なる意味用法を持ちながら関連しあっており、その関係は、時代と共に変化し、また文体によっても違いがあると考えられる。本稿では、平安・鎌倉時代における、和文、漢文訓読文、和漢混淆文を対象として、これら⁽⁵⁾三語の意味用法の差異性と共通性、並びにその通時的変化について考察する。

二、和文における用例の検討⁽⁶⁾

和文における三語の出現状況は次頁、表1の様になる。

まず、和文における「たまたま」の意味用法を、用例に即して具体的に検討したい。

①(源氏↓女五)おほえぬつみにあたりはへりてしらぬよにまとははへりしをたま〜おほやけにかすまへられたてまつりては

定条件句として、可能性の小さい幸運が起こることを想定する場面に用いられている。以上の用例を中心に、和文におけるすべての「たまたま」を羅めたものが次の表2である。

〈表2〉

たまたま		たまたま		たまたま	
宇津保物語	とりかへばや物語	栄花物語	源氏物語	枕草子	宇津保物語
話(涼)	話(大将)	話(伊周)	話(源氏)	話(大進生昌)	話(仲忠)
	大将	定子	源氏	生昌	仲忠
	(逢坂)越えにけり	(彰子方ニ) 召し使はせ給 平らかにおはしまさば	(公ニ) 数まへられたてまつる	(進士ノ) 道にまかり入	仲忠 北の方 けだもの 仰給へれば 俊蔭 藤英 院ニ) まかりつきし (唐ヨリ) 帰り侍りて 仰給へれば
有り難し・うれし		世に目出度 幸入 もし(仮定条件句)			
					同文脈に あらわれる語句

修飾される述部については、ある職・位に就くこと、すなわち人生で一回限りで起こることが四例(まかりつく・まかり入・数まへらる・召し使はす)その他も、二度三度起こることは想定され難い、

その場限りの偶然的なできごとが起こることを示すものが中心である。また、同じ文脈に現れる語句に注目すれば、「世に日出度幸人」や「ありがたし」「うれし」のように、それが起これば幸運であるという表現が特徴的に見られる。したがって、和文における「たまたま」は、起こる可能性が小さい事柄（特に、思いがけなく、一回限りで起こる事柄）が実現した場合や、その実現を仮想した場合に用いられ、その偶然性を表すものと考えられる。

次に「たまたま」について考察する。まず、用例の多い源氏物語の用例に限って検討すると、その用法は、大きく次の二つに分類できる。

A 「たまたま」と同じく、思いがけなく、一回限りで起こる

事柄に用いられるもの（偶然性を表す）

B 起こる回数は少ないが、時間的間隔を開けて何度か起こり得る事柄に用いられるもの（頻度の小を表す）

具体的な用例は次のようになる。

〈Aの用例〉

① 年をへて思ひわたりけることのたまたまかにはいかなひて心やすからぬすちをかきつくしたることはいと見所ありてあはれなれといとかくさやかにはかくへしや（源氏物語 若菜下 一一九二⑨）

② （尼↓源氏）のたまはすることのすちたまたまかにもおほしめしかはらぬやう侍らはかくわりなきよはひすき侍りてかならずか

すまへさせ給へ

（源氏物語 若菜 一七八③）

③ （夕霧）いかならむかん日にもありけるをもしたたまさかにおもひゆるしたまは、あしからむなをよからむ事をこそとうるはしき心におほして

（源氏物語 夕霧 一三三五⑧）

用例①は、柏木が長い年月をかけて女三の宮を思い統けていたのが、やっと望みがかなった、という文脈で用いられ、その幸運が偶然起こったことを表している。用例②③は、仮定条件句に用いられ、可能性が小さい事柄が起こることを仮想するものである。先の「たまたま」と同じく、Aに分類されるものは、その偶然性に加えて、文脈的には幸運性を読み取れるものが多いが、「たまたま」の場合には用例③「思ひ許し給はば悪しからん」のように、よくないことが起こることを想定するものも存する。

〈Bの用例〉

④ （源氏↓紫）いかにきこゆへき事おほくつもりにけりとおほえむとすらんひとひつかたたまさかにへた、るをりたにあやしういふせき心ちするものをとてみすまきあけてはしにいさなひき

こえ給へは

（源氏物語 須磨 四二二⑥）

⑤ 色／＼のかみにてたたまさかにかよひける御ふみの返こといつ、むつぞある

（源氏物語 橋姫 一五四一⑦）

⑥ ゆめなどにいとたまさかにみえ給ときなともありおなしさまなる女などそひ給ふてみえ給へはなこり心ちあしくなやみなとし

ければ

(源氏物語 玉鬘 七二一⑧)

⑦いと、人めのたえはつるもさるへきこと、思なからいとかなしくなんなにともみさりし山かつもおはしまさて後たまさかにさしのそきまいるはめつらしくもおもほえ給

(源氏物語 権本 一五七④)

用例④は、光源氏が須磨に流される時、紫の上に、「一日二日離れる時でさえ、気がふさがるような心地がするの」と言っているもので、以前に二人が隔たったことのある経験を踏まえた表現であると思われる。用例⑤は、「五つ六つぞある」という語句から、そのやりとりが何度か行われたものであることがわかる。用例⑥は、「時などもあり」という表現や副詞「いと」がついて頻度が小さいことと程度を強調していることから、夢にあらわれたのが一回限りではなかったと考えられる。用例⑦は、「めづらし」という語が見られることから、回数は少ないながらも、時々は山賤が現れることがあったとわかる。

また、いわゆる形容動詞としての「たまさかなり」も、同様の観点から見るができる。

⑧はかなきひとくたりの御返のたまさかなりしもたえはてにたり
七月になりてそまひり給ひけるめつらしうあはれにいていと、し

き御思ひのほとかきりなし

(源氏物語 若紫 一七六⑤)

⑨山へのほる人なりとてもこなたのみちにはかよふ人もいとたま

さかなりくるたにとかいふかたよりありくほうしのあとのみま
れくはみゆるを例のすかたみつけたるはあひなくめつらしき
に

(源氏物語 手習 二〇三七⑥)

⑩(頭中将)うらめしとおもふ事もあらむと心なからおほゆるお
りくも侍りしをみしらぬやうにてひさしきとたえをもちかうた
まさかなる人とおもひたらす (源氏物語 帚木 五六④)

用例⑧は「返事がたまさかであったのも絶えてしまった」とあり、絶え果てる以前には何度かやりとりがあったことがわかる。用例⑨も、破線で示したような語句から、「たまさかに」が、何度か起こり得る事柄について用いられていることがわかるものである。これらの用例を見ると、先の「五つ六つ」や「時などもあり」のように、複数回を示す語句、また、「絶え果てにたり」や「久しきとだえ」のように、以前は何度か繰り返されたことを示唆する語句が見られるものが多い。

源氏物語以外の用例についても同様である。即ち、先述のA(思いがけなく、一回限りで起こる事柄について用いられ、偶然性を表す)用例⑪⑫のようなものと、B(起こる可能性は小さいが、何度か起こり得る事柄について用いられ、頻度の小を表す)用例⑬⑭のようなものが存する。

(Aの用例)

⑪いと難きあきなひなり。しかれども、もし天竺にたまさかにも

修飾される述部は次のようである。

A……思ひ許す・思し召し変はらず・叶ふ・もて渡る・会ふ・

出づ・(歌ヲ)遣る

B……来ル(通ふ・参る・渡る・訪ふ・訪ね寄る・見え訪ふ・

立ち寄る・見ゆ・さし覗く)

文ヲ遣ル(ものす・きこえさす・きこゆ)

会ウ(会ふ・対面す)・(来ルノヲ)待つ・(遊ビナド)

す・(装束ナド)す・あり・出づ・出し入る・へだつ・

なりもてゆく

両者を比較し、あえて特徴を指摘するならば、Bに分類した用例では、「来ル」「文ヲ遣ル」「会ウ」「来ルノヲ待つ」を始めとして、日常的に行われる行動や、人と人との行き来に関する語が多く見られる。このことも「たまさかに」が何度か起こり得る事柄について用いられる語であることを示唆すると考えられる。

以上から、和文における「たまさかに」は、本来起こる回数が少ない事柄が、思いがけなく一回限りで起こるといふ偶然性を表し、一方でまた、時間的間隔を開けて何度か起こるといふ頻度の小をも表す、ということになる。

次に、「まれに」は、大きく次の二つに分類できる。

B 「たまさかに」と同じく、起こる回数は少ないが時間的間

隔を開けて何度か起こり得る事柄に用いられるもの(頻度

の小を表す)

C 物事の数量が少ないことを表すもの(数量の小を表す)

具体的な用例は次のようになる。

(Bの用例)

①片時他にとまる事なく、まれに内裏に参りては、即ちいそぎまかてつ、例ありしやうに、宮仕へもせず、限りなく思フ。

(宇津保物語 嵯峨院 二四八⑨)

②はかなきことにてもみとふらひきこゆる人はなき御身なりた、御せうどのせむし(禪師)の君はかりそまれにも京にいてたまふ時はさしのそき給へと

(源氏物語 蓬生 五二二①)

③あさり(阿闍梨)もいか、とおほかたにまれにをとつれきこゆれと

今はなにしかはほのめきまいらむ (源氏物語 榎本 一五七⑪)

(Cの用例)

④かのすまはむかしこそ人のすみかなともありけれいまはいとさとはなれ心すこくてあまのいゑたにまれになとき、給へと

(源氏物語 須磨 三九五③)

⑤侍従、辨などいふ若き人々のみ候へば、年にそへて人日まれにのみなりゆく古郷に、いと心ぼそくておはせしに

(堤中納言物語 思はぬ方にとまりする少将 四〇二⑩)

Cに分類したものは、主語に「家」や「人目」という、人物でない具体物を取り、その数が少ないことを表すものである。

少ない)ことは、単に客観的な回数のの少なさだけでなく、究極的には、一回しか起こらないこと、起こることが予想し難いことが実現する場合の偶然性にもつながる。これが「たまたま」の持つ「偶然性」という意義特徴と関連している。一方で、(起こる回数が少ない)ことは、それが「できごと」ではなく、具体物について用いられる場合には、より客観的な「数量の小」を表すことになる。これが、「まれに」の持つ「数量の小」、言い替えれば「希少性」という意義特徴と関連する。つまり、(ある事柄が起こる回数が極めて少ない)とくらられる三語の共有の意義特徴は、大きくは「偶然性」「希少性」という二つの方向に広がるものであり、前者の意義特徴を担うものとして「まれに」が存すると考えられる。そして、その中間に位置し、「偶然性」と「頻度の小」との意義特徴を担うものとして「たまさかに」が存するのではないだろうか。

三、漢文訓読文における用例の検討

漢文訓読文における、三語の出現状況は次の表5の様になる。「たまたま」が、今回の調査の範囲では平安後期の資料、具体的には「高野山龍光院藏妙法蓮華經」以降に見られるのに対し、「たまさかに」は、平安初期の資料に偏って見られる。

〈表5〉

小計	7	3	7	1	5	1	2	1	1	2	3	4
23												
5												
9												

書名	タ	マ	タ	マ	カ	カ	ニ	マ	レ	ニ
山田本妙法蓮華經										
小川本願經四分律										
西大寺本金光明最勝王經										
玄奘法師表啓										
東大寺藏十輪經										
正倉院藏十輪經										
興聖寺藏西域記										
法華經玄贊 淳祐古點										
聖語藏辨中邊論 天曆點										
石山寺藏佛說太子須陀經										
石山寺藏沙彌十戒威儀經										
法華義疏 長保四年點										
不空絹索神呪心經										
知恩院藏地藏十輪經										
天理図書館藏南海寄歸内法傳										
無量義經										
高野山龍光院藏妙法蓮華經										
書院部藏管見記紙背文選										
興福寺本大慈恩寺三藏法師傳										
神田本白氏文集										
広島大学藏八字文殊儀軌										
石山寺藏大唐西域記										
天理本白氏文集										
高山寺本論語										
高山寺本史記										
高山寺本莊子										
天理本古文尚書										
天理本文選										

具体的な用例の検討を行う。まず「たまたま」は、和文の場合と同じく、思いがけなく、一回限りで起こる事柄について用いられる。

用例は次のようになる。

①生(レ)テ佛ニ遇(ハ)不復(タ)微善ニ乘(リ)テ預メ像ヲ聞ケリ〔三依也〕末法ニ生(シタリ)何ノ歸依スル所(カ)アラハ又慶(フ)ラクハ少

(ク)シテ出家(スル)コトヲ得テ

(興福寺本大慈恩寺三藏法師傳 卷第七297)

②昔遊方シテ彼ニ在(クニ)ニ因(リ)テ遇(ク)光儀ヲ觴キ

(興福寺本大慈恩寺三藏法師傳 卷第七346)

③菩提樹ヨリ赴て方(ニ)鹿園に詣キタマシ時二長者〔トキ〕適(チ)威光を被(ル)其(ノ)行路(ノ)資(ニ)隨て遂に麴密を獻(ス)

(石山寺藏大唐西域記 卷第一373)

④若(シ)少し所得有れば便(チ)以(テ)足(リ)ぬと為す。後(ニ)〔於〕親友會(ニ)遇(ビ)て之を見て〔而〕是(ノ)言を作(サク)

(龍光院藏妙法蓮華經 卷第四 五百弟子受記品 八13)

⑤美ヲ西州ニ振ヒ功ヲ東閣ニ歸ス〔屬〕有道ニ逢フ時惟我カ皇ナリ

(興福寺本大慈恩寺三藏法師傳 卷第十七20)

⑥仙は威力有(リ)能く災祥を作(ス)憊(ク)心を遂ケ不(ハ)必(ズ)瞋怒を起(シ)國ヲも毀ヒ祀ヲモ滅(シ)テム

(石山寺藏大唐西域記 卷第五609)

用例①は、人の出生に関して用いられている。用例②～⑤は、そ

の場合限りの場面的な事柄に用いられていると解せる。また、用例⑥は、左訓に「モシ」ともあり、仮定条件句となる。

次に「たまたま」を見ると、これも「たまたま」と同じく、思いがけなく、一回限りで起こる事柄について用いられている。具体的な用例は以下の通りである。

①大徳世尊我等本(より)獨覺乘の中に在(リ)て曾し善根を種(ス)キ。獨覺乘の器も成熟すること能(ハ)未(タ)後に復(シ)遇(フ)大乘の法(ヲ)を(説)きたまふ(ヲ)を(聞)き(ツ)。

(正倉院藏地藏十輪經 卷第七 第五)

②罪の人聞き己(リ)て命を護(ラ)むが為の故に即(チ)鬚髮を剃り袈裟を求覓す。偶(ニ)カに一ツ片を得て自ラ其の頸に繫(ケ)ツ。

(東大寺藏地藏十輪經 卷第三之二221)

③王の曰(ク)大樹仙人幸(ニ)顧ミテ婚セムコトヲ求ム。而(ル)を汝が曹輩背(ク)て命に從(フ)こと莫シ。仙人は威力有(リ)能く災祥を作(ス)。

(石山寺藏大唐西域記 卷第五609)

④經 復作是念至无復憂慮 贊曰 此は已に樂(ム)と念ふ。子に財を付(くる)こと无(け)む。所以に憂(へ)慮ふ。子い脱(ト)に訓ヒ領(ズ)れは豈(ニ)樂(カ)ら不(ト)するや〔哉〕

(法華經玄贊 第六882)

用例①は、「まだ成熟していないときに法を聞いた」という文脈の中で、その偶然性を表すと考えられる。用例②③の「たまたまに」

も同様に、頻度ではなく、その場面での偶然性を表している。また「脱」字で読まれた、用例④の「たまさかに」は、仮定条件句として、文脈的には「万一」という意味で用いられている。以上から、漢文訓読文において「たまたま」と「たまさかに」とは、意味用法をほぼ同じくするものであって、思いがけなく、一回限りで起こる事柄に用いられ、その偶然性を表すものと考えられる。

次に「まれに」を見る。これは和文の場合と同様、B、頻度の小を表すものと、C、数量の小を表すものが存する。具体的な用例は次のようになる。

〈Bの用例〉

①支^シ通^トカ^カ晉^シ朝^トニ^ニ禮^トセ^ルラ^トト^ト称^セ七^七シ^シモ^ス澤^ノ澤^ヲ聞^クコト^ト罕^ナリ

(興福寺本大慈恩寺三藏法師傳 卷第九)

②始^トを^ト原^トネ^ト終^トを^ト要^スするに^ニ能^ク正^シく^ト説^クこと^ト罕^ナリ此^レ指^シ事^之之^実

録^(に)して^尚シ^衆論^(之)若^(キ)ナ^リ。

(興聖寺藏大唐西域記 490)

〈Cの用例〉

③礫^石多^シ播^シ植^シ植^レト^モ滋^カラ^不稀^ニ少^ナシ^遂に^空荒^を致^(シ)絶^て人^止(ま)る^{こと}無^(シ)

(興聖寺藏大唐西域記 147)

④況^ヤ茲^(の)邦^(の)之^(之)絶^遠ナル^ヲヤ^(哉)。然^モ(而)、鈞^奇(の)之^(之)客^世に^希ニ^(シ)て^間ニ^至て^頗ル^記注^を存^(す)レ

ト(も) (石山寺藏大唐西域記 序51)

ここで一度、和文と漢文訓読文とを比較して纏める。

「たまたま」と「まれに」とは、漢文訓読文でも和文でも意味用法はほぼ同じであった。ただし、和文での「たまさかに」がA(偶然性)、B(頻度の小)二つの意味をあわせ持つのに対し、漢文訓読文での「たまさかに」は、A(偶然性)を表すのみであった。

		たまたま	たまさかに	まれに
和文	A	A	A B	B C
漢文訓読文	A	A	B C	

A 偶然性 B 頻度の小 C 数量の小

ここで、「たまたま」と「たまさかに」との差異を、更に考えてみることにする。先に触れたように、漢文訓読文における「たまたま」と「たまさかに」との出現状況を比較すると、「たまたま」は平安後期以降に、「たまさかに」は平安初期に集中して見られる傾向にある。また、和文における「たまさかに」のうち、漢文訓読文における「たまたま」「たまさかに」と同じく、偶然性を表すAに分類されたものは、竹取物語や平中物語といった、早い時期の和文資料であった。この二つを考え合わせると、「たまたま」と「たまさかに」との差異性の一つに、新古関係が挙げられよう。更に考えれば、平安初期に見られた、偶然性を表すAの「たまさかに」は、平安後期以降、「たまたま」に取って変わられ、漢文訓読文においては語自体が

減少していく。一方、和文においては、偶然性を表す意味用法を失う代わりに、B（頻度の小）の意味用法を持つことにより、「たまたま」と共存することができたのではないか。⁽⁹⁾

四、和漢混淆文における用例の検討

以上の考察を踏まえ、さらにその通時的変化を捉えるために、院政、鎌倉期の和漢混淆文における用例を検討することとする。出現状況は次の表6のようになる。「たまさかに」は、今回調査した限りにおいては二例のみであった。

具体的に意味用法を考察する。まず、用例の少なかった「たまさかに」から検討する。

① 后^ミ泣^ク白^ク太子^ノ心動^ク難^シ今日^ノ前^ニ死^スナリ見^ルハ猶免^レシ

太末佐加^ニ還来^リモヤ来^リマツト馮^ミ待^ツト云^フ

（観智院本三宝絵 上14オ7）

② 旧都はあはれめでたかりつる都ぞかし。（中略）されども今は辻々をみな掘き（ツ）て車な（ン）どのたやすうゆきかふ事もなし。たまさかにゆく人もこ車にのり路をへてこそとをりけれ。

（覚一本平家物語 巻第五 三三六③）

用例①は、「帰り来たる」ことを假想する文脈に用いられており、「万一」という意味を表すものである。用例②は、頻度の小を表すものと考えられる。

〈表6〉

計	光言句義釈聴集記	十訓抄	東関紀行	海道記	平治物語	保元物語	閑居友	宇治拾遺物語	覚一本平家物語	三教指帰注	打聞集	古本説話集	法華百座聞書抄	観智院本三宝絵詞	
12		4						1	4			1		2	たまたま
1									1					1	たまさかに
0															たまさかの
0															(形容動詞)
4					1				3						まれに
1							1								まれの
15		3					2	6						4	(形容動詞)

次に、「たまたま」については次の通りである。

①家ニ返テ妻ニ語フ我未^ク昔^ク金^ノ色乃^レ厭^ム右ト聞^サリキ今日^ニ是を見^ツッ
若^シ適^ク是^ヲ殺^シ皮^ヲ剥^テ王^ニ奉^タラシ我家^ハ悦^ビ有^テ孫^世、マ^チ財^ニ
豊^ニ成^ナラト云^フ (観智院本三玉絵 上22オ6)

②是モ親モ子モ思ハカリナキヨリアル事也。カ、ルモノタマ^ノカ
宮仕ヲ思立トモサル振舞ヲスルウヘハ心ニ入ル主モナシ。
(十訓抄 中第七 四⑥)

③祇王入道殿に申けるは、「あそびものの推参がつねのならひでこそさぶらへ。其上年もいまだをさなふさぶらふなるが、適々^々たつてまいりてさぶらふ(覚一本平家物語 卷第一 九六⑩)

④在中平中トテ、ツカヒテ世ノスキモノト云レケルカ、此侍従ヲシメ^ノトケシヤウシケレトモツレナカリケリ。或時ハタマ^ノカ
出合タリケレトモ、エモイハススカシヲキテ
(十訓抄 上第一 五六②)

用例①は、仮定条件句に用いられるもの、用例②③は、「思い立つ」という一回的な動作を表す動詞を修飾している。用例④「ある時はたまたま出会たりけれども」も、その時に限って起こった事柄について用いられているものである。このように、和漢混淆文における「たまたま」は、和文、漢文訓読文での意味用法と同じく、思いがけなく、一回限りで起こる事柄について用いられ、偶然性を表すものと考えられる。

最後に「まれに」は、和文や漢文訓読文での意味用法と比べて大きな変化はない。つまり、起こる可能性は小さいが、時間的間隔を開けて何度か起こり得る事柄について用いられ、B、頻度の小を表すものと、具体物を主語として、C、数量の小を表すものがある。

(Bの用例)

①……雲は雨露をかされて、佛壇さらにはあらはなり。住持の僧もなければ、まれにさし入物とは、月日の光ばかりなり。

(覚一本平家物語 卷第五 三五六⑪)

(Cの用例)

③八月十日あまりに、福原よりそのぼり給ふ。何事も皆かはりはてて、まれにのこる家は、門前ふかくして庭上露しげし。

(覚一本平家物語 卷第五 三三八⑩)

したがって、和文から和漢混淆文へという流れの中で「たまたま」「たまさかに」「まれに」を見ると、変化のあったのは、「たまさかに」の用例数の減少、「たまたま」の用法の拡大、ということになる。

五、まとめ

以上、和文、漢文訓読文、和漢混淆文を対象として、平安鎌倉時代における「たまたま」「たまさかに」「まれに」の意味用法について考察した。その基本的な関係については先に、和文での考察のところでもまとめ、表にした。また、三語の関係の、和文と漢文訓読文

との間における違いについては、漢文訓読文での考察のところで触れた。ここでは、その後の通時的变化を考察し、最後のまとめとしたい。

用例数の多寡を措いき、単純化して示すと、次の表のようになる。

		たまさかに			たま			
ま	れ	に	た	ま	た	ま		
和漢混淆文	和文	漢文訓読文	和漢混淆文	和文	和文	漢文訓読文	平安初	
							平安中	
							平安後	
							院政	
							鎌倉	

A 偶然性 B 頻度の小 C 数量の小

上から下へという時間の流れの中で、「たまたま」は、漢文訓読文と和文とにおいて「たまさかに」にやや遅れて、具体的には平安後期以降に、Aの意味用法を持つ語として現れ、以後定着する。

「まれに」は、漢文訓読文、和文、和漢混淆文において、変わらず

ずB(頻度の小)、C(数量の小)の意味用法を持ち続ける。

「たまさかに」は、平安初期にはAの意味用法を持つ語として存在するが、漢文訓読文においては、「たまたま」の現れる平安後期以降、ほとんど用例が見られなくなる。しかし、和文においては、Aの意味用法は減少しながらも、Bの意味用法を持つことにより、平安後期以降にも多く用いられる。そして、鎌倉時代以降、和漢混淆文に至っては、漢文訓読文の場合と同様、用例数が減少して行くこととなった。

和文で多く用いられていた「たまさかに」が、和漢混淆文では減少する理由については、ひとつにはいわゆる和漢混淆文という文体が、漢文訓読文の文体的な特徴をも受け継ぐためと考えられる。つまり、漢文訓読文では平安後期以降用例が減少することを受けて、院政期以降の和漢混淆文においても、用例数が減少すると考えられるのである。また、「まれに」の存在もひとつの要因と考えられる。つまり、「たまさかに」は、和文ではB(頻度の小)の意味用法を持つことにより「たまたま」と性格を異にし、共存するものの、元来和文、漢文訓読文を通じてBの意味用法を持ち続ける「まれに」が存したため、独自性を持ち得ず、減少していったとも考えられる。いずれにしても、この「たまさかに」の変化の要因を、具体的に明らかにすることが今後の大きな課題のひとつになる。¹⁰⁾

本稿は、三語の大きな関係を述べたに過ぎず、なお上代文献や

和歌の用例を含め、綿密な調査が必要である。今後更に、意味用法の重なりを中心に考察を深めて行くとともに、意味的に関連のある他の語を加えた分析を考えている。

注

(6) 先行の御論考には次のようなものがある。

池田亀鑑「「さが」「さがな」「たまさか」の語義」〔国語と国文学〕二十四卷六号 昭和二十二年)

木之下正雄「平安女流文学のことば」〔至文堂 昭和四十三年十一月)

(1) 佐藤喜代治「国語語彙の歴史的研究」(昭和四十六年十一月)

明治書院) 前田富祺「国語語彙史研究」(昭和六十年十月)

明治書院) 等

(2) 宮地敦子「身心語彙の史的研究」(明治書院 昭和五十四年)

前田富祺 注(1)文献 安部清哉「温度形容語彙の歴史―意味構造から見た語彙史の試み―」〔文艺学研究〕108 昭和六十年一月) 等

(3) 安部清哉「動詞ワカツ・ワク等の意味・用法と語彙史」〔国語学研究〕24 昭和五十九年十二月) 等

(4) 「たまさかに」「まれに」は、いわゆる形容動詞の連用形であるとも考えられるが、本稿では、副詞「たまたま」との比較のため、その連用修飾用法を中心に考察することとする。

(5) 用例を検索するにあたり、翻刻、索引の公刊されている文献については、それを利用していただいた。紙幅の都合上、全てを記せないが、その学恩に深く感謝申し上げる次第である。

(7) 築島裕「平安時代における漢文訓読語につきての研究」(東京

大学出版会 昭和三十八年十月) で御指摘のあるように、出現状況から、「たまたま」は漢文訓読語、「たまさかに」は和

文語と見ることが出来る。また、表2に示したように和文における「たまたま」は、十一例中八例が会話文に用いられる。

但しその会話主は、北の方のように、必ずしも漢文訓読に深く関わるとは言えない者も含まれており、その文体的特徴については更に視点を変えた考察が必要であろう。

(8) 数量の小を表す「まれに」は、「希少性」のみならず究極的には数量の少ない物に対する価値観を表す「貴重さ」の方向へ派生して行くことが予想されるが、現段階ではそのことを積極的に証明できるような考察には至っていない。

(9) 現段階では、鎌倉時代物語の調査がまだ進んでいないため、和文における「たまさかに」の榮花物語以降の出現状況については、今後慎重に検討したい。

(10) 小林隆「変化の要因としての語彙体系」〔国語学研究〕24 昭

和五十九年十二月)では、語彙の意味関係の変遷の実態を記述するだけでなく、その要因についての考察が重要であるとの御指摘がある。

——広島大学大学院博士課程後期在学——

付記

本稿は、国語学会中国四国支部第三十七回大会(平成四年十一月十四日於徳島大学)での口頭発表をもとにまとめたものである。席上、またその他の折に、小林芳規先生、関一雄先生、原卓志先生をはじめとして、多くの方々より貴重な御教示を賜った。また、稿を成すにあたっては、菅原範夫先生に懇切な御指導を賜った。ここに記して心より御礼申し上げる。